

## 第五條

一 親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと云々。

親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したこと  
は、かつて一度もありません。

というのは、命のあるものはすべてみな、これま

**追善供養** 人の死後、死者に縁のある生存者が、その死者のためにあとから追って善事を行うこと。

で何度となく生れ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな救わなければなりません。

念仏が自分の力で努める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしましようが、念仏はそのようなものではありません。

自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな生を受け、どのような苦しみの中にあるとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、何よりもまず縁のある人々を救うことができるのです。

このように聖人は仰せになりました。